

河内祥輔先生を送る

法政大学, 史学会

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

210

(終了ページ / End Page)

221

(発行年 / Year)

2013-03-24

河内祥輔先生を送る

河内祥輔先生は、二〇〇七年三月、北海道大学を定年退職され、同年四月、法政大学文学部教授として史学科に着任されました。そして、この三月末日をもって退職されることになりました。

六年間の在任中には、大学院で日本史学原典研究・日本中世史特殊研究・史学特研演習を、学部で日本史概説・日本古文書学・日本中世史演習・日本史特講、このほか基礎科目や通信教育のスクーリングなどをご担当されました。また、先生は、多忙な校務のなかで、中世天皇制に関する著書や論文を精力的に執筆なされています。天皇制に関する法政大学国際日本学研究所の研究においても重要な役割をはたしていただきました。

ここに先生の御経歴・御業績の紹介をすると共に、お人柄の一端を紹介し、これまでの学恩に感謝の意を表すことにいたします。

河内祥輔教授の履歴と業績

【略年譜】

- | | | |
|-------|----|-----------------------|
| 一九四三年 | 十月 | 北海道に生まれる。 |
| 一九六二年 | 三月 | 北海道札幌南高等学校卒業。 |
| 一九六三年 | 四月 | 東京大学入学。 |
| 一九六七年 | 三月 | 東京大学文学部卒業。 |
| | 四月 | 東京大学大学院人文科学研究所修士課程入学。 |
| 一九六九年 | 三月 | 同修士課程修了。同博士課程進学。 |
| 一九七一年 | 三月 | 同博士課程退学。 |
| 一九七三年 | 四月 | 同所助手。 |
| 一九七七年 | 五月 | 北海道大学文学部助教教授に転任。 |
| 一九八九年 | 四月 | 同学部教授。 |
| 二〇〇〇年 | 四月 | 同大学院文学研究科教授。 |
| 二〇〇七年 | 三月 | 北海道大学を退職（定年。同大学名誉教授）。 |
| | 四月 | 法政大学文学部教授に就任。 |
| 二〇一三年 | 三月 | 法政大学を退職。 |

【主要著作目録】

- 一九七〇年 「法然の思想と実践」(『歴史学研究』三六五号)
- 一九七六年 「班田収授制の特質」(『歴史学研究』別冊特集「世界史の新局面と歴史像の再検討」)
- 一九七七年 「大宝令班田収授制度考」(『史学雑誌』八六編三号)
- 一九八〇年 「王位継承法試論」(佐伯有清編『日本古代史論考』、吉川弘文館)



河内祥輔先生を送る

- 一九八二年 「御成敗式目の法形式」(『歴史学研究』五〇九号)
- 一九八三年 「奈良朝政治史における天皇制の論理」(佐伯有清編『日本古代政治史論考』、吉川弘文館)
- 一九八四年 「勅旨田について」(土田直鎮先生還暦記念会編『奈良平安時代史論集(下)』、吉川弘文館)
- 一九八六年 「古代政治史における天皇制の論理」(吉川弘文館)
- 一九九〇年 「頼朝の時代——一八〇年代内乱史——」(平凡社)
- 一九九一年 「日本中世の朝廷・幕府体制」(『歴史評論』五〇〇号)
- 一九九二年 「大江匡房の後三条天皇伝」(『神道大系月報』一〇一号)の「中世史」、吉川弘文館)
- 一九九五年 「中世における神国の理念」(佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の伝承と東アジア』、吉川弘文館)
- 「学芸と天皇」(永原慶二他編『講座 前近代の天皇(四)』、青木書店)
- 一九九八年 「白河院と大江匡房」(『国文学 解釈と鑑賞』七七三号「六〇巻一〇号」、至文堂)
- 「朝廷・幕府体制の成立と構造」(水林彪他編『王権のコスモロジー』、弘文堂)
- 二〇〇一年 「御家人身分の認定について」(『鎌倉遺文研究』七号)
- 「王土王民思想と「皇民」」(『日本歴史』六三四号)
- 二〇〇二年 「保元の乱・平治の乱」(吉川弘文館)
- 二〇〇三年 「中世の天皇観」(山川出版社)
- 二〇〇六年 「中世の国家と政治体制」(大津透編『王権を考える——

―前近代日本の天皇と権力― 山川出版社)

二〇〇七年 『日本中世の朝廷・幕府体制』(吉川弘文館)

『後醍醐天皇の倒幕運動について』(『法政史学』六八号)

二〇〇八年 『村上天皇の死から藤原道長「望月の歌」まで』(『史学雑誌』一一七編一一号)

『朝廷と幕府―なぜ朝廷は続いたのか』(歴史科学協議会編 『天皇・天皇制をよむ』 東京大学出版会)

『承久の乱と天皇―流罪された天皇』(同右)

二〇一〇年 『中世前期の政治思想』(宮地正人等編 『政治社会思想史(新体系日本史4)』 山川出版社)

『平将門と「新皇」』(同右(コラム))

『中世における天皇について』(法政大学国際日本学研究所編 『日本文化の中の天皇―天皇とは?』(国際日本学研究叢書二二))

二〇一二年 『天皇と中世の武家(天皇の歴史4)』(第一部・鎌倉幕府と天皇) (講談社 ※共著)



河内祥輔先生を送る言葉

河内祥輔先生を送る

後藤 篤子

北海道大学で長く教鞭を取られ、日本中世政治史の分野で令名高い河内祥輔先生が法政大学文学部史学科に着任なさったのは、二〇〇七年四月のことであった。あまり詳しくは語れないが、当時の史学科はある問題を抱えていて、学科内の建て直しと信用回復が急務という状況であった。そのためにも河内先生のご令名とご実績に期待する雰囲気は学科内にはあった。河内先生はそのような内情はご存じなかったかもしれないが、果たしてご着任後の先生は、史学科のために期待に違わぬ貢献をしてくださった。

お人柄は優しいながらも学問的には厳しいご指導で、日本中世史を専攻する学生・院生を導いてくださり、ご着任後わずか二年目の二〇〇八年度には、人文科学研究科日本史学専攻（当時はまだ「史学専攻」ではなく、「日本史学専攻」であった）の専攻主任

を引き受けてくださった。さらには、六五歳を過ぎた教員には教授会執行部や学科主任等の「きつい」仕事は回さないという文学部内の「原則」を承知していながらも、例外的に二〇〇九年度の学科主任をお引き受けただきたいという学科の無理なお願いにも、快く応じてくださった。二〇一〇・二〇一一年度には法政史学会会長の任もお務めくださった。また毎年、入試業務にも携わってこられた。

先生ご自身は、北海道大学を定年でお辞めになった後は、教育とご研究に専念できる静穏な日々を期待しておられたのではないかと思うのだが、ご着任後、教育とご研究のかたわら、このように立て続けに重要校務をお引き受けくださった。にもかかわらず、苦情めいたことが先生のお口から発せられたことは一度もなく、いつも変わらぬ穏やかさで、淡々と仕事をこなしてくださった。ただただ感謝申し上げるしかない。

その河内先生があと二年定年延長できるにもかかわらず辞意を漏らされたと耳にした時には、史学科が「酷使」したせいではな

いかと案じずにはいられなかった。だが先生は、そのようなこと
はないからと仰ってください、その折にも学科内の事情を考慮し
てご退職を一年延ばしてください。先生がいよいよご退職なさ
る今、胸にこみあげてくるのは感謝の念だけではなく、史学科が
いろいろご無理をお願いしたことに対する申し訳なさである。

六年間という短い在職期間にもかかわらず、法政大学文学部史
学科に決して消えることのない足跡を残してください。河内先生、
本当にありがとうございます。そして、お疲れ様でございました。
これからの先生のご健康と、ますますのご研究の発展を祈念して
やみません。

惜別の言葉

澤登 寛聡

河内祥輔先生とのおつきあいは、先生が北海道大学を定年退官
され、本学文学部史学科に來られた六年前にさかのぼります。

先生は、該博な知識に裏づけられたご著書もたくさん出してお
られますが、実に物静かにして謙虚な先生であるというのが、最
初の印象でした。そして、この印象は、今も代わることなく続い
ています。先生のご専門は天皇制の研究ということですが、中世
史のご担当なので古文書学の授業を持たれています。わたしは、
自分の担当する近世史ゼミナールの学生・大学院生にはなからず
古文書学の授業を受講するように常日頃から伝えているのですが、
こうしたこともあって先生には比較的多くの学生がお世話になり

ました。大学院生などは、先生の古文書学の講義は、実に丁寧で、
かつ格調高く、大変に勉強になったといきいきと話してくれるの
ですが、こうした話しを聞かされたら、私も、先生のような学生に
感動を与えられる授業ができればよいのだがと感じたことが想い
出されます。

先生は故郷も北海道ということで、北海道の寒さや一軒家に住
まう暮らしの中で、雪下ろしの作業が実に大変な事などの話しを
よくしてくださいました。また、公務を代わってくださいたりと
大変、お世話になりました。北海道にお帰りになっても、どう
か、元気で暮らしてください。今となつては長いようで短い六年
間でしたが、本当にいろいろとお世話になりました。東京にお出
でになった際には、ぜひまた、お気軽に、このポアソナードタワ
ー十五階の史学科研究室に足をお運びいただければと思います。

河内祥輔先生を送ることは

長井 純市

河内先生、研究・教育両分野のみならず学内の学務関係業務に
おきまして、たいへんお世話になりました。ありがとうございます。
ここに、先生のご退職を迎え、先生を送ることを述べますことを、
寂しく思うと同時に、光榮に思います。

河内先生を本学科にお迎えするに至った事情については詳述致
しませんが、率直なところ当時本学科が苦境にあったことを認め
ないわけにはいきません。先生をお迎えすることにより、その後

本学科、ひいては本学全体がどれほど安定したかを見れば、先生の果たされた役割の大きさが分かります。それは、本学が将来にわたって先生のご在職に感謝し続けるところと確信致します。

先生が週末の休日に出校され、ご自身の研究に没頭されている姿を拝見し、私自身、後輩研究者として、たいへん励まされました。専門違いの私が先生のご研究を云々することは出来ませんが、学務関係業務における共同作業を含めて、日本中世史における王権や武家政権、また同時期の文化を論じる先生の学識に接し得たことは、私の人生において幸せな時間であったと確信致します。本学奉職以来、それまで職場で日本史研究そのものを話題として、楽しく有意義な歓談の時間を持つことは、相手が大学院生を除けば、ほとんどなかったものですから、先生にはひたすら感謝するのみです。

また、前任校とは気質の違う学生を暖かく見守り、教育なさっていらつしやる姿は、先生の温厚な人柄そのものでした。とりわけ研究に専念する大学院生には心強い指導教員を得ることができたという思いが強かったのではないのでしょうか。先生のご指導を得て、学内外の学術誌に論文を発表したり、学会で研究報告をしたりする大学院生が登場したことは、本学科・専攻の誇りとするところですよ。まして、大学院生の研究テーマが多岐にわたっているにもかかわらず、先生がいずれにも真摯に指導・助言を与えて下さったのであればなおさらです。

今後は先生には引き続き研究に専念なされることと拝察致します。先生の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。なお、

河内祥輔先生を送る

今後とも私共を見守り、先生を師と仰ぐ学生をお心に掛けて下さいますようお願い申し上げます。

河内先生への言葉

加納 格

河内先生の御着任は、二〇〇七年春であった。その年度私は、在外研究に出たので直接お会いすることなく御着任を過ぎることになった。私の在外研究は、ロシア、アメリカ、スイスと動き回るものだったので、住むところでうまくメール環境を整えたいが、だめな場合は音信不通になってしまう。そうした中でニューヨークの滞在先で先生からのメールを拝受した。それは、出発前に紀要の投稿願を提出していたのでどうしますかと私の意向を尋ねられるメールであった。出国前は書くつもりでいたのだが、出てしまうと資料収集に追われてとても落ち着いて書ける状況にはなかった。自分の非才ぶりを改めて恥じ入りつつも、申し訳ないけれども提出できませんと書き送ったことを思い起こす。国内にあっても提出されなければ、そのまま過ぎてしまうことが普通なので、なんとご実直なお人柄の先生なのだろうと感じ入った。

帰国後遅ればせながら直接面識を得ることになった。ニューヨークでメール越しに想像したそのままの先生で、ご担当の公務分掌の事柄に関してもメールでこまめにご連絡をいただいた。強い責任意識の成せることであろうと思う。

一年を残してのご退職で、札幌に戻られると聞く。今後のさら

なるご活躍を祈念したい。また札幌はロシア関係の機関、研究者が多く、私も赴くことがある。札幌でまたお目にかかることもあることと思う。今後も宜しくご厚誼のほどお願い申し上げます、送る言葉にしたい。

河内先生の御退職に際して

中村 純

河内先生、短い間でしたがいろいろとお教えいただきましてありがとうございました。先生が法政においでくださったのはたしか二〇〇七年のことではなかったかと記憶しております。そのすぐあと二〇〇八年からは私の方が学科会議にも出ないようなことになりましたのでお仕事を御一緒にさせていただくどころか顔をあわせることも同じ学科の教員同士にしては言いぶん少なかったように思います。それでもなんだか、勝手な言い分ですが、ずいぶん親しくさせていただいたような気がするのは私の北海道大学時代の恩師のことを河内先生がよくご存知で、お目にかかった最初の時からそんな話が出来たからではなかったかと思っております。ある時はろくろく研究もせずにはかの仕事にかまけている私に、いつまでもそんなことをしていると北大の先生に破門されてしまいますよ、と冗談めかして笑いながらたしなめていただいたこともあります。きつとそんなことを言っても聞くわけもないと思っておられたのでしょうか。しかし言われた方としては、骨身にしみてずいぶんありがたく思い、そしてまた反省もしました。

そして今この文を書きながら相変わらずの生活を送っている自分を振り返ると、もう二度と御忠告をいただくこともないのだなど寂しく思うばかりです。ご忠告を忘れたわけではありません。ありがとうございました。

河内祥輔先生を送る

小口 雅史

意外に思われるかもしれないが、私が河内先生に初めてお目にかかったのは、二〇〇六年のことである。北海道大学を定年退官後、法政大学へお出でいただき、その関連行事においてのことなのである。であるから、直接の、と限定すれば、意外に短いおつきあいであったとも言える。先生は当初、東京大学史料編纂所に奉職しておられたが、私が本郷に進学したすぐあとに北大に転出されたので、史料編纂所勤務中にもお会いしてはいない。

河内先生はご専門の中世天皇制ないし中世の朝廷関係のものほかに、古代天皇制に関する著書はもちろんとして、さらに律令班田収授制ないし勅旨田といった古代の土地制度についての論文や、書評が多数ある。このあたりは私の専門に近いこともあって、当然旧知の關係であろうとしばしば言われたものである。

しかし、日本中世史には、中央の学会でなかなかお目にかかれぬ二人の大家がおられることは「業界」内部では周知のことであった。そのうちのお一人がもちろん河内先生である。河内先生を法政大学にお迎えすることが決まったとき、学部内の複数の女

性教授陣から「私、河内先生のファンだったの！なかなかお目にかかれることがなかったけれど、こんど同僚になれてうれしい。ぜひ紹介してください」と言われたことも、すでに想い出の内になった。

先生のご研究は多岐にわたり、とくに初期には、先にも触れたように日本古代史分野でも豊富な業績をお持ちであるが、先生の古代史研究は、古代史を明らかにするというよりは、最終的には荘園制が成立するにいたる、その道筋を解明することにあつたように思われる。それらの研究を通して、日本史というものについての一つの見通しを得ることができたのではあるまいか。一般に古代とか中世という言葉で時代を分けると、そこには質的な違いがあるかのように思う方が多いであろうが、実のところは同質の社会が長期にわたって継続しているというのが日本史の実態ではあるまいか。その特徴の最たるものが、天皇を頂点とする朝廷という存在に、顕著に現れているのではないか、という研究へと繋がっていったのではないかと拝察いたしております。そこから、先生の唱える著名な「正統の論理」へとつながっていったのでしょうか。また法政大学赴任後に刊行されました大著『日本中世の朝廷・幕府体制』では「朝廷再建運動」という概念も提起されておられます。

六年間という短い期間ではありましたが、私どもはこうして、先生からたくさんのお話を学ばせていただきました。また本年度からは「古文書学的手法の創造による日本・西欧の社会秩序と封建制移行過程の比較研究」と題する科学研究費補助金グループの

河内祥輔先生を送る

研究代表を務めていただいております。この助成期間は四年間で、本学ご退職後もしばしば上京していただくことになりま。ですからまだまだ先生からはたくさんのお話を教えていただけそうです。ご健康に十分留意され、今後とも引き続き、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

河内祥輔先生を送る

小倉 淳一

河内祥輔先生が着任される時、同郷の大先輩をお迎えするような気がして頼もしく感じていた。先生は札幌南高等学校ご出身で、私の出生地となった家は札幌市内にそびえる藻岩山の麓（市立旭丘高等学校の校門前）にあつたためである。もともと、先生が札幌で高校生活を送っておられた頃、私はこの世にまだ影も形もなかったため、そしてまた先生が北海道大学に赴任された頃には、私はすでに北海道を離れていたのではある。しかし、同じ北の大地で生を受けた者として勝手に親近感を覚えていた私は、先生のご着任を心待ちにしていたのだ。

研究室が隣接していることもあって、先生には日頃からさまざまなお話をうかがうことができた。はじめの年に印象的だったのは、先生が東京にお越しになって楽になったことは、何といつても雪かきをしなくてよくなったことだとおっしゃったことであつた。ほんとうにしみじみとお話になった。失礼ながら、先生が雪かきをされているお姿を全く想像できなかったのではある

が、雪の深さと寒さをおぼろげな記憶の中にたぐりつつ、北国の生活のご苦労を感じた次第である（ちなみに北海道は粉雪なので雪が軽いなどとはなっていない。降り積もった雪の重さは想像以上なのである）。

先生のお仕事ぶりを近くで拝見していて、いちばん見習いたいと思ったのは学生との対話の姿勢である。用事があって先生の研究室の扉を叩くと、多くの場合先生は学生と談笑しておられた。それがゼミや卒論の指導という機会であったのかどうか、今とってはわからないが、時には数人の学生を交えて楽しそうに話されている様子に接するたびに、また先生のお邪魔をしてみました。心の片隅で思いながら、暖かい雰囲気の中で研究やゼミについての直接の指導を大事にされていること、それを多くの学生と続けておられることをいつも感じていた。そのような中で、河内先生とゼミ生有志の諸君を横浜の博物館にご案内できたことや、法政大学史学会の見学会で先生に金沢文庫と鎌倉をご案内いただいたことは、私にとって大変よい機会になった。そして仕事上のさまざまな場面で先生のお知恵をいただいた。ご体調の面で先生にぜひ無理をお願いしてしまったことにはお詫びを申し上げます。先生が札幌にお帰りになるとうかがい、さびしい気持ちで一杯であるが、故郷でのさらなるご活躍を祈念申し上げる次第である。ぜひ今度は北海道でお目にかかれますように。

河内祥輔先生を送る

齋藤 勝

この二年、校務の関係で校内をよく歩き回っていたが、どういふわけか河内先生をお見かけすることが多かった。河内先生がとりわけよく校内を徘徊しているというわけもなく、おそらく他の先生方も歩いているはずだから、単にこちらが気づいたか否かの問題である。不思議なことに、河内先生が校内を歩いていると、遠くからでも気づいてしまうのだ。

ご存知のように先生は目立つ体格をされているわけではないし、ただ歩いているだけで特別なことをされているわけでもない。では、なぜ河内先生が私の視野の中に入ってしまうのだろうか。それは先生を持つ空気力の力なのだと思う。

河内先生が持つ空気は、私が学生だった二十年前に「大家」とされていた先生達から感じた空気と一緒である。それは「学者」の持つ空気であり、私が憧れた空気であり、最近ではほとんど感じるものがなくなった空気である。そして、その空気に触れると学問を志した頃の気持ちが蘇ってくるのである。

ところで、河内先生をお見かけした時に私がどうしたかといえば、声をおかけしたのは失礼ながら三回に一回くらいだったのではないかと思う。最大の理由は、私との長話（ご存知の方も多いでしょうが、話したら止まらない。しかも下らない。）で先生の貴重なお時間を浪費させるわけにはいかないと思っていたからである。そしてもう一つは、仕事にかまけて研究を怠っている自

分に引け目があったから。

そんなある時、先生から「じつくり研究に専念すべき年齢なのに校務に追われるようにさせてしまい、年長者として申し訳ない。」と劳いの言葉をかけて頂いたことは忘れがたい思い出である。

河内先生が法政大学にいらつしやつたのはわずか六年間に過ぎないが、その間に河内先生に感化され学問に取り組んだ人の数はどれほどに上るだろうか。出来ることなら、全学生・教員のために一年でも長く法政大学にいて頂きたいというのが本音であるが、先生の北海道への愛の深さもよく存じあげているので、無下にお引き留めすることも出来ない。せめて北海道を訪れた折にでも、お会いして頂ければと願うばかりである。

河内先生の思い出

古澤 直人

河内先生との学問上の出会いは約三十年前に遡る。私が大学院に入つて二年目の一九八二年、河内先生の「御成敗式目の法形式」という論文が『歴史学研究』五〇九号に掲載された。この論文は、御成敗式目に関する佐藤進一氏の学説、いわゆる「原式目論」を真つ向から批判し、式目の法形式が律令の条文構成が依拠すると結論され、式目を延喜式に連なる「式条法」と位置づけられたものである。式目を研究課題としていた私は、目の前に突如現れた新説であった河内先生の論文と格闘することになった。しかし、当時は河内説の全体像と正面から対決しないまま、式目一条から

河内祥輔先生を送る

八条までと三五条についての（式目と律令の）対応関係の疑点のみを掲げて「河内説にはわかに従えない」と安直な形で処理して、自説の展開を急いだ覚えがある。それゆえか、式目に関する河内説の主張は現在にいたるまで胸に引つかかったままである。石母田正氏をはじめ、中世史研究者は式目を高く評価する人が多い（賤す人はあまりみたことがない）。私もその通説の延長線上にすぎないから、内心忸怩たるものがある。しかし、河内先生はそうした通説に敢然と一人異を唱えられたのである。先生はその四年後、『古代政治史における天皇制の論理』を発表された。私の理解では、その後の先生の膨大な著作群は、この著書の主張をもとに展開されており、その意味で河内先生の著作群の原点に位置する仕事である。すなわち〈古代政治史の事件や争点はつねに天皇という存在に発するが、朝廷という組織にとつて最大の問題は、天皇の權威が確立する問題であり、その天皇の權威は皇統の形成によって確立される〉という言説である。そして、これを契機に、振を切つたかように発表し続けられた膨大な著述群で、この視点から一貫して南北朝期まで分析しようと思われたものと思われる。中世に関しては、一九九〇年『頼朝の時代』において〈皇位継承問題からみた治承承永の内乱理解〉を示され、頼朝をはじめ（後白河の權威に対する武士の従属性）を指摘された。別言すると、天皇（後白河）に幕府が直接従属する朝廷・幕府体制という体制理解を示された。こうした観点は、『保元の乱・平治の乱』（二〇〇二年）、近年の『日本中世の朝廷・幕府体制』（二〇〇七年）、『天皇と中世の武家』第一部「鎌倉幕府と天皇」（二〇一一年）まで一貫してい

る。〈天皇權威の確立〉〔「正統」の理念からみた天皇観〕〈朝廷・幕府体制の議論〉など、つねに通説にとらわれぬ孤高のスタイルを貫かれてきていて、これは、三〇年前と変わらぬ先生の学説の特色である。実は今、とある事情で、三〇年前と同様に、先生の「平治の乱」の議論と格闘中である。史料の誤読はないか、論理の破綻はないか、と、ちよつと褒められない読み方で、一字一句を追っている。その作業で分かったのは、容易に異論を許さぬ、先生の学説体系のなかでの強靱な論理性である。せっかく、法政にいらしたのにもつと教えを乞えばよかつた。気が小さくで、先生の研究室を訪ねられなかつた。今頃になつてそれが悔やまれてならぬ。

(法政大学経済学部教授)

河内先生との六年間

本間 志奈

私が大学院博士後期課程に進学した年、河内先生は法政へ赴任下さつた。その少し前、新任の先生が河内先生だと判つた時、嬉しく思つたことを記憶している。先生の御名前や御研究は勿論以前から存じ上げてはいたが、学部の中の恩師から、河内先生のお話を何度か伺つていたこともあり、是非一度お目にかかつてみたいと思つていた研究者の一人であつたからだ。そして、初めてお目にかつた時の穏やかで気さくな先生のご様子に、大変感動したのであつた。

先生の赴任後、私は『吾妻鏡』を読み進めるゼミに参加させていただいた。正直、『吾妻鏡』についてはそれまでの学生生活でそれなりに読み込んできたつもりであつたが、それは本当にただの「つもり」であつた。先生の御見識の深さ・広さを目の当たりにし、自身の未熟さを痛感した。承久の乱・宝治合戦、そして治承四年の頼朝の挙兵記事をご一緒させていただいたのだが、こちらとしては学年も学年であり、担当箇所への調査力についてはそれなりに自信があつたのだが、先生は黒いファイルを開かれ、穏やかに不足している部分を指摘された。その黒いファイルには何でも取められているようで、中々太刀打ちできず、稀に先生のご存じない史料等を掲げることが出来た時などは、内心相当喜んだものである。

もう一つ、先生との六年間で強く思い出となっていることは、二〇一一年四月に我が家に院生達とお越し下さつた時のことだ。我が家は寺であり、ちよつとこの年は「武相卯歳観音霊場巡り」と呼ばれる一二年に一度の御開帳であつたことから、お越しいただけたのだが、寺の周辺を案内している際に、「あなたはこういう所で生活してきたんだねえ」と感慨深げにおっしゃられたことが、とても強く印象に残っている。私の危機感のない学生生活に、いつものように柔らかくご注意下さつたのか、或いは別の意味なのか、お言葉の意味を知りたいような知りたくないような複雑な気持ちである。まだまだ思い出は尽きないが、この辺で擱筆したい。

河内先生にご指導いただいた六年間は、私にとつてとても充実したものでありました。頼りないゼミの年長者として多大なご迷

惑をお掛けしたことは心からお詫び申し上げ、また、そんな私にも諦めることなく丁寧にご指導下さったことに、心より感謝し御礼申し上げます。そしてこれからの河内先生の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

河内先生の言葉

花岡 康隆

二〇〇八年の一月も半ばを過ぎた頃、私は路頭に迷っていた。どうにか修士論文を提出したはよいものの、就職先が決まっていなかったからだ。

学校の教員をしながら研究を続けるという「二足の草鞋」に憧れていた私は大学院修了後の職業として私立高校の教員を志望していた。しかし、いくら採用試験を受けても不採用通知が届く日々。そんな日々の中で肝心な修士論文も納得いくのをまとめることはできなかつた。行き先も決まらず、研究も中途半端なまま修士課程を終えていく自分の不甲斐なさに自暴自棄になりつつあった。

そんな頃のある日、最終面接まで進んでいた高校が結局不採用だったという報告をするため先生の研究室を訪ねたことがあった。落ち込む私を見るに見かねた先生は私を研究室に招き入れてくださると、なぜか研究についての話を始められた。そこで先生が私におっしゃった言葉が意外なものだった。

「あなたは史料を読むのが好きだから、ぜひ研究を続けてほしい」

河内祥輔先生を送る

この言葉、先生は何気無くおっしゃったのだと思う（多分、先生は覚えていらつしゃらないだろう）。しかし、自信を失い目標を諦めかけていた私にとってはとても大きな一言だった。出来の悪い自分を先生がそんな風に思っていて下さったとは……。私はその言葉で再び目標に向かって奮起することができた。とにかくとびきりに嬉しい一言だったのだ。

その後、私はどうにかある高校の講師として教壇に立つことができ、現在は幸いにも地元の公立高校に奉職している。また、先生のご指導のおかげで博士課程に在籍しながら研究も続けることができている。あの日の先生の言葉がなければ今の自分はなかつただろう。そしてこれからも先生の言葉を「二足の草鞋」の原動力として頑張っていくつもりだ。

私が高校の教師として目標にしていることがある。それは、教え子が道に迷った時、そっと進むべき道を照らしてやるような言葉をかけられる教師になるということだ。あの日の河内先生のように。

河内先生、本当にありがとうございました。